

口腔乾燥緩和を目的としたピロカルピン・アルギン酸ナトリウム含有液剤の使用感の評価

○山田 千里<sup>1</sup>, 細野 浩之<sup>1</sup>, 市ノ川 義美<sup>3</sup>, 山岡 桂子<sup>2</sup>, 渡邊 真知子<sup>1</sup>(<sup>1</sup>帝京大薬, <sup>2</sup>帝京大病院薬, <sup>3</sup>帝京大病院歯科口腔外科)

【目的】 口腔乾燥症は、会話障害、嚥下障害等により QOL を著しく低下させる。当教室では唾液分泌促進効果を期待して、ピロカルピン塩酸塩 (Pilo) を主薬とし、基剤としてアルギン酸ナトリウム (Alg-Na) を用いた口腔内液剤、Pilo 液 (0.3%Pilo, 1%Alg-Na, 0.1%NaHCO<sub>3</sub>) を調製した。本剤を臨床で継続的に使用するためには、その使用感が良好であることが求められる。そこで今回、シェーグレン症候群などによる口腔乾燥症の緩和を目的として使用されている人工唾液サリベート®と本剤の使用感を比較検討した。

【方法】 文書による説明と同意を得た健康人 (20~30 代) に対して平常時、Pilo 液またはサリベート®を使用し、直後に味 (総合的、甘み、苦み、渋み、酸味、塩辛さ)、におい、刺激性について、強さと不快さを 10 cm の visual analogue scale (VAS) で評価した。同様に、触感、容器の使いやすさ、容器の外観についても評価した (各 n=7)。また、サンプル使用後の味の残存性も評価した (各 n=7)。

【結果・考察】 使用直後における、味 (総合的) (中央値 3.2, 最小値 0.9~最大値 7.8 vs 6.7, 4.0~10.0)、味 (甘み) (0.0, 0.0~1.6 vs 4.6, 0.2~6.0)、刺激性 (2.2, 0.0~6.9 vs 7.8, 2.4~10.0) の強さにおいては、Pilo 液がサリベート®に対し有意に小さい値となった ( $p<0.05$ )。また不快さでは、味 (総合的) (3.2, 0.1~7.0 vs 7.4, 5.5~10.0)、味 (甘み) (0.0, 0.0~2.0 vs 5.6, 0.0~8.0)、触感 (2.5, 0.0~5.5 vs 7.1, 3.5~9.1) において Pilo 液がサリベート®に対し有意に小さい値となった。残存性にはほとんど違いはみられなかった。これらの結果から、Pilo 液はサリベート®よりも継続して使いやすいと考えられた。